

いじめ加害者の心理

1220405 安部 真結希

指導教員 出馬圭世

研究背景

いじめによる問題は年々深刻化しており、令和元年度でのいじめの認知件数は過去最多であった。令和2年度のいじめ認知件数は減少したもののネットいじめにおいては過去最多を更新した。

研究目的

オンライン上で匿名性を保証した上で初対面同士でもいじめは発生するのか、またどのような要因からいじめが発生するのかを探ることを目的とする。特に本研究では、外見が異なる他者の存在がいじめを誘発するかを検討する。

調査・分析方法

実験にはオンラインで繋がった3人1組でキャッチボールを行うサイバーボール課題にを用いた。3人とも同じ白色のアバターを使用しキャッチボールをするベースライン条件に加え、一人だけアバターの色が異なる外見条件の二条件を用いた。どちらの条件でも各参加者はボールを受け取った際に、残りの二人のうち誰に投げるかを自由に決めることができた。3人で合計60回のパス回しを行い、その間に仲間外れが起こるかを検討した。データの分析は、1組3名を分析の単位とし、3人のうち一番ボールを受け取った回数が少なかった人が、ボールを受け取った回数をいじめの指標とした。このいじめ指標の値をベースライン条件と外見条件でMann-WhitneyのU検定を用い比較した。

分析結果

ベースライン条件のいじめ指標の平均値は18.65であった。これはいじめ指標の最大値20に近いことから、何の操作もしていないベースライン条件は仲間外れが起こりにくいことが分かった。一方、外見条件のいじめ指数の平均値は15.76であった。いじめ指標がベースライン条件と外見条件で異なるかをMann-WhitneyのU検定を用いて検討した。その結果、外見条件でいじめの指標が小さくなる傾向が見られた。

考察・結論

本研究の結果から、ベースライン条件と外見条件を比較して外見条件の方がいじめが起こりやすい傾向にあると結論付ける。しかし、ボットが使われることが多くいじめが起こるかどうかを効率的に検討することができなかった点と、実験後の質問紙の回答率が十分でなかったことから性別や年齢との関連を検討することができなかったことが課題である。